

延慶本『平家物語』「実定卿待宵ノ小侍従ニ合事」に就いて

水 谷 亘

はじめに

十二巻本で言うところの『平家物語』巻五のあたりといえ、清盛による福原遷都が強行された、将に「平家の悪行においては悉くきはま^①」った時期を描いた部分であった。この福原遷都に就いては、今までにも多くの議論がなされてきているけれども、平家一門の祖たる桓武天皇がお定めになったこの平安京より、清盛が福原の地へと遷都したという事に就いて、物語がこれを悪行の極みとして表現していることには異論はないように思われる。『平家物語』に於いて、この福原遷都が悪行の極みと規定される理由としては、幾つかの根拠があげられようが、中でも、「先祖の御門のさしも執しおぼしめされたる都を、させるゆゑなく、他国・他所へうつさるることあさましけれ。(寛一本)」とあるように、遷都という行為自体が、

平家自らの血脈に対する裏切りとしてとらえられていることこそ、この遷都が、物語の中で、平家の悪行の頂点として位置づけられていることを示しており、それ故、物語では、その後、平家一門に対して、まるで通奏低音がピアノニツシモで鳴り続けるかの如く、不吉な出来事が起こることになるのである。

さて、物語はそのような遷都を描いた直後に、延慶本で言う「実定卿待宵ノ小侍従ニ合事」(所謂「月見」)の章段を配する。福原遷都から二カ月後というから、新都は多少なりとも落ち着きを見せはじめてきた頃であつたらう。人々は中秋の名月を鑑賞しようと、ある者は須磨・明石の月を眺めたという。京の地を離れてもなお、王朝の雅やかな世界を求めようとする人々。そこに我々は、平家の横暴によって福原の地に移り、悲観に暮れて日々を過ごしている反面、同時にそのような中でも、王朝的雅を探し求めることで、自分たち

のスピリットを保ち続けようとする力をも感じるのである。そんな中、徳大寺実定卿は、福原の地より、京を目指した。それは「古京ノ月ヲ詠ント（延慶本）」でであった。そして旧都に戻った実定卿の目に映ったその光景は、覚一本では「何事も皆変りはてて、まれに残る家は、門前草ふかくして、庭上露しげし。蓬が柚、浅茅が原鳥のふしどとあれはてて、虫の声々うらみつつ、黄菊・紫蘭の野辺とぞなりにける。」と描かれ、延慶本でも「旧苔道滑ニ而秋草閉門、瓦ニ松生、墻ニツタ滋リ、分入袖毛露ケク、アルカナキカノ苔ノ路、指入月影計ゾ面替リモセザリケル。」と表現される変わり果てた情景であった。この変わり果てた旧都で、実定卿は妹太皇太后多子のもとを訪れる。そこで彼は、まるで『源氏物語』「橋姫」の一場面を彷彿させるかの如き場面、「大宮琵琶ヲ弾せ給ケリ。（延慶本）」を見ることになるのである。櫻井陽子氏は、この荒れ果てた旧都の描写と、そんな中で王朝的雅さを醸し出している多子の住居の場面の描写との二点を示して、「月見」はこの二点が融合し、絡みあいながら展開している。第一の特質（筆者注……王朝的雅さの部分）に伴って、荒廃をうたう今様に、朗詠という優美な趣向そのものが印象に加わる。また蓬生卷や橋姫卷を連想させる描写も、決してはなやかな貴族文化を再現するものではない。陰性の、うち捨てられた者、という共通項が旧都の描写に重なりあつて、この場面の状況

延慶本『平家物語』「実定卿待宵ノ小侍従ニ合事」に就いて

に陰翳を含ませ、余情を持たせることになる。これによって、理性的に遷都を批判し、悲憤慷慨を述べる『都遷』とは対照的な、主情的に情感豊かにうたいあげる『月見』ができあがることになる^③とされた。傾聴すべきお説であろうと思われる。ここで語られる雅の世界は、懐古の念に包まれたものである。懐古の念は、現在がそのような状況ではない、という前提のもとに成り立つ訳であり、従つてその念が強く描かれれば描かれるほど、享受する側に与える印象は、現在の状況がそういった雅やかな世界とは真逆のものであるということになるのだろう。

また志立正知氏は、『平家物語』における「都遷」について「中で、「都遷」に続く「月見」は、人々のこうした京の都に対する「愛着」の深さを、極めて抒情的な叙述の中に示した章段といえる。徳大寺実定卿の旧都への思慕の情は、当時の人々に共通する感情であったに違いない。同時に、ここに示された王朝的世界に対する憧憬の念は、京の都の象徴性を示唆するものと考えられるのではないだろうか。」^④として、この福原遷都が持つ悪行性を、人々の京の町に対する愛着の深さを描くことで、より一層強いものとしている、とされた。確かに、この「月見」に描かれる実定卿の京への愛着ぶりは、我々に嘗て華やかであった頃の京の町への憧れの念を感じさせ、それと対照的に、今の荒れ果てた京の町を描くことで、今の京

の現実に向き合わされ、より強く平家の悪行を感じることになるのだろう。しかし、その一方で、こういう考え方もできよう。つまり、これほど荒れ果てた京の町ではあるけれども、そこには、幽かではありつつも、しっかりと息づいている王朝的雅のスピリットがあり、そのスピリットがこの荒廃した京の町の片隅に於いてでも息づいている限り、平家には都を遷すことはできても、人々のスピリットまでも遷すことはできないのだ、と。そして、実定卿こそが、そのスピリットを哀しみの福原の地からやって来て、確かに見届けたその人なのでないか、と。

では、「月見」に於ける王朝的雅の世界は、具体的にはどのように描かれているのか。物語は、先述の『源氏物語』「橋姫」巻を出しながら、大宮が琵琶を奏でる場面を描いていく。このことから、この場面が『源氏物語』「橋姫」巻を踏まえていることは、述べるまでもないことであるが、それ以外にも注目すべき点はあるように思われるのである。本稿では、そういった「月見」という章段を、どのようにとらえることが可能なのか、その可能性に就いて、特に延慶本の場合を中心に据えて、考えてみたいと思う。

日付の問題をめぐって

さて、延慶本では徳大寺実定卿が、妹のもとを訪れたのは「八月

十五夜」のこととなっている。

〈延慶本〉

後徳大寺ノ左大将実定卿ハ、古京ノ月ヲ詠ントテ、旧都へ上リ給ケリ。御妹ノ皇太后宮ノ八条ノ御所へ参給テ、月返、人定テ門ヲ開テ入給タレバ、旧苔道滑ニ而秋草閉門、瓦ニ松生、墻ニツタ滋リ、分入袖毛露ケク、アルカナキカノ苔ノ路、指入月影計ゾ面替リモセザリケル。八月十五夜ノクマナキニ、大宮御琵琶ヲ彈セ給ケリ。「彼ノ源氏ノ宇治ノ巻ニ、優婆塞ノ宮ノ御娘、秋ノ名残を惜テ、琵琶を弾ジ給シニ、有明ノ月ノ山ノハラ出テケルヲ、猶不堪ヤ覚シケム、撥ニテマネキ給ケムモ、カクヤ有ケム」ト、其夜ヲ被思知ケリ。

この延慶本の「八月十五夜」に妹のもとを訪れたとする記述は、他の諸本には見えない。そこで今、この部分に就いて、諸本が舞台となった日付を表現している部分を並べてみると、およそ次のとおりである。

〈長門本〉

此中に後徳大寺左大将実定ふるき都を恋て、八月十日あまりの比にや、入道の宿所へ行向ひて、今一度旧都の月を見候はやと存候、さねさたいとまを給候なんやとのたまひければ、入道いづよりも心よけにて、何かはくるしく候へき、とくとくと有け

れは、実定よろこひてむちをあけてそのほられける。

〈四部本〉

具体的な日時に關する記述は認められない。

〈源平盛衰記〉

八月半ノ月ナレバ、マダ宵ナガライツル月、主ナキ宿ニ独住、折知ガホニ鳴雁ノ音サヘツラクゾ聞召。大将ハイトド哀ニ堪ズシテ、大宮ノ御所ニ參リ、待宵ノ小侍徒ト云女房ヲ尋給フ。

〈寛一本〉

其なかにも、徳大寺の左大将実定の卿は、ふるき都の月を恋て、八月十日余りに、福原よりぞのほり給ふ。何事も皆変りはてて、まれに残る家は、門前草ふかくして、庭上露しげし。蓬が柚、浅茅が原、鳥のふしどとあれはてて、虫の声々うらみつつ、黄菊・紫蘭の野辺とぞなりにける。故郷の名残としては、近衛河原の大宮ばかりぞましましける。

〈百二十句本〉

そのうちにとく大じのさ大しやうさねさだのきやうは、きうとの月をしたいて、にう道しやうこくのかたへあんないえて、八月十日あまりにふくはらより、みやこのかたへのほられけり。なに事もむかしにかはりはてて、のこるいゑはもんぜんくさふかく、ていじやう露しげし。あさでふがはら、よもぎがそま、

延慶本『平家物語』「実定卿待宵ノ小侍徒ニ合事」に就いて

とりのふしどとあれはてて、むしのこゑごゑうらみつつ、くはうぎくしらんの野べとぞなりにける。こきやうのなごりとは、このゑがはらの大みやばかりぞおはしける。このように見えていくと、

- ・日付の記述がまったくないもの……四部本
- ・実定卿が福原を発つ日、若しくは発つために清盛のもとを訪ねる日を記すもの……長門本・寛一本・百二十句本
- ・実定卿が妹のもとを訪ねた日を記すもの……延慶本・源平盛衰記

となる。延慶本と盛衰記に、実定卿が妹のもとを訪れた日にちが記される。しかし、そのうちの盛衰記の記述は、「八月半ノ月ナレバ」というものであり、従って延慶本のみが、その日にちを具体的に示している、ということになる。それが「八月十五夜」であった。

八月十五夜をめぐって

八月の十五夜といえば、わたくしたちはすぐに「物語の出で来はじめのおやなる（『源氏物語』「絵合」）『竹取物語』の名場面を思い起こすであろう。言うまでもなく、かぐや姫が月の都へと昇天なさるあの場面である。しかし、王朝物語の世界にあっては、八月の十五夜から連想される作品は、『竹取物語』だけではなかった。『源

氏物語」の中にあつて、八月十五夜といへば、「夕顔」巻で、光源氏が夕顔のもとを訪れる場面で、

（源氏物語・夕顔）

八月十五夜、隈なき月影、隙多かる板屋残りなく漏り来て、見ならひたまはぬ住まひのさまもめづらしきに、あか月近くになりにけるなるべし、

と表現されている。延慶本と共通しているのは、「八月十五夜」の月が「隈なき」ものであつたという点である。そして「夕顔」巻のこの場面で描かれている情景は、隣の家の声や、衣打つ砧の音が聞こえてくるような、光源氏のような高貴なお方には見慣れない景色であり、一見すると、王朝的雅の世界からはほど遠いようなものである。そういう意味では櫻井氏のおっしゃる「陰性の、うち捨てられた者」という、イメージとも重なるものであり、従つて『平家物語』が記すようなら寂しい京の町的情景と共通する部分があるようにも思われるのである。それだけではない。この『源氏物語』の中で、源氏は、このようなうら寂れた場所にいる素性も知らないこの夕顔という女性が、まったくこのような場所には不釣り合いでいる様子に、寧ろ惹かれていたのであつて、単なるうら寂れた場所の描写（小学館『新編日本古典文学全集 源氏物語（一）』で、「くた

くたしきことのみ多かり」の注に「下層社会の記事は読者に好まれ

ない^⑤」とあるように、身分の高い方々にとつては、あまり好ましいとは思えないように感じられる描写）に終始しているわけではないだろう。「大宮御琵琶ヲ弾せ給ケリ」の様子は、うら寂れた場所に似つかわしからぬ姿であり、まさに『源氏物語』の夕顔の姿と同様である。それは、あの貧しい人々の生活するうら寂れた町中（読者にも好まれないような）にあつて、ひときわ異彩を放つ夕顔の姿と似ているということである。そのようなうら寂れた場所にやつて来た源氏の、夕顔とのロマンスは、『平家物語』に於ける実定卿の待宵小侍従とのロマンスと重なつてくることを考える必要があるのではないだろうか。『平家物語』に於ける実定卿が、変わり果てた京の町を行くその姿は、うら寂れた町を行く源氏の姿と重なつてくる。そして、それだけではなく、そこには待宵小侍従という女性がいて、そのようなうら寂れた中で、唯一と言つていいであろう、雅やかな様子を漂わせている。

また『うつほ物語』「沖つ白波」巻で、「八月十五夜」といへば、正頼が婚たちを連れて参内し、宮中にて管弦の遊びが催された時であつた。加えて、この『うつほ物語』に於いても、この夜は、

（うつほ物語・沖つ白波）

神泉のなん風は、おどろおどろしく声大にして、今宵のほそを風は、高きいかめしく響き、静かに澄める音出で来て、あはれ

に聞こえ、細き声、清涼殿の清く涼しき十五夜の月の隈なく明かきに、小夜更け方に、面白く静かに仕うまつる。

とあり、延慶本や『源氏物語』『夕顔』巻同様に、「隈なき」月であったという表現がなされている。

さて、この「隈なき」月であるが、『平家物語』では、この後、また同じような状況下で表現されることになる。即ち、「小督」にあたる部分がそれである。お嘆きなさる帝のために、仲国が琴の音色をたよりに、小督を探して歩く、その直前の場面である。

〈延慶本〉
比ハ八月十日余ノ事ナレバ、月ハクマナクサヘタレド、御涙ニ陰リツツ、御袖ノミゾ時雨ケル。

〈長門本〉
相当する部分がない。

〈四部本〉
相当する部分がない。

〈源平盛衰記〉
比ハ八月十日余の事なれば、さしも陰なき月なれども、御涙にくもりつつ、臙に照す空なれや、

〈寛一本〉
かくて八月十日あまりになりけり。さしもくまなき空なれど、

主上は御涙にくもりつつ、月の光もおほろにぞ御覽ぜられける。

〈百二十句本〉

さるほどに八月十日あまりにもなりけり。しゆしやうさしもくまなきそらなれど、御なみだにくもりつつ、月のひかりもさやかならず、

このように、微妙な違いは存するものの、各本文ともに、「八月十日あまり」の「月(空)」が、「隈なき」様子であったと表現されている。そして、この場面も「月見」の場面と同様に、このような情景の中で、美しい音楽が流れてくるのである。

またこの名月の夜は、当然、和歌の世界に相応しく、相当の数の歌が詠まれている。中でも清原元輔の
船にのりてありて、八月十五夜

琴の音も池のそこひもおほ空のさやけき月にひかれてぞすむ
などに読まれた世界は、先の『うつほ物語』や「小督」同様に、名月の明かりの下、美しい音楽が流れている、そんな世界である。

おそらく、当時の人々にとって、「八月十五夜」とは、以上見てきたような、先行する様々な作品に表現されてきたような世界、即ち、王朝浪漫漂い、美しい音楽が流れ、しみじみとした情感を感じずにはいられないような、そんなイメージではなかつたらうか。また、月の「隈なき」美しさは、『うつほ物語』『沖つ白波』巻や、

延慶本『平家物語』『実定卿待宵ノ小侍従ニ合事』に就いて

『源氏物語』『夕顔』巻にも認められるように、「八月十五夜」の月の表現としては、王朝物語の所謂「名場面」とも言えるような部分で用いられてきたものであった。

さて、物語はこの後、実定卿が今様を歌いあげる。延慶本では「アマノ上丸」という横笛を取り出して歌ったとあるが、この笛に就いてはよくわからない。しかし、この部分、「古京ノ有様ヲ今様に作り」とあり、寛一本の「ふるきみやこのあれゆくを、今様にこそうたはれけれ」などと比べても、延慶本が「古京」「今様」と韻を踏んだ表現になっていて、非常に趣深いものとなっているように思われるのである。

さて、その今様であるが、

古京都ヲ来テミレバアサチガハラトゾナリニケル

月ノ光モサビシクテ秋風ノミゾ身ニハシム(延慶本)

諸本により、若干の相違はあるが、このようなもので、旧都となった京の町を再び訪れてみたものの、そこに展開する変わり果てた風景に、寂しさを感じているのである。

『菅家文章』第一巻に「八月十五夜、月前話旧、各分一字」という詩がある。

秋月不知有古今

一條光色五更深

欲談二十餘年事

珍重當初傾蓋心

八月十五夜に月下の元、昔を懐かしんで物語する、そんな内容の詩である。『平家物語』、とりわけ延慶本の記述、八月十五夜に昔を懐かしんで今様を歌う、というシチュエーションと重なってこよう。

おわりに

延慶本は、今まで比較してきたところからも明らかのように、「実定卿待宵ノ小侍従ニ合事」にあつては、他の本文が規定しない妹を訪ねた日にちを「八月十五夜」と定めている。また、その夜の月が「隈なき」ものであったことも、同時に示している。これも他の本文には認められないものであった。こういった一点から考え得ることは、「実定卿待宵ノ小侍従ニ合事」のこの場面に於いて、延慶本は、他の諸本と比べて、王朝物語の世界に描かれているような小道具（それは、他の諸本では『源氏物語』『橋姫』巻の一節を踏まえた表現を行ったりしているが、延慶本はそれ以外にも日時の表現があつたり、月の描写があつたりするわけだが）を用いることで、より王朝的雰囲気醸し出すことに成功しているのではないだろうか、ということである。また、その「八月十五夜」とは、道真が「昔を懐かしんで物語した」と詩った将にその夜であり、実定卿の

昔を想う姿は、延慶本に於いて、より一層、王朝の世界のイメージと強く重なって行くのである。「実定卿待宵ノ小侍従ニ合事」は、『源氏物語』に代表されるような王朝世界を意識することで、平家の悪行により荒んでしまった旧都の情景のその中に、華やかなりし往時の京の姿を垣間見せる。それは、とりわけ延慶本に於いては、『源氏物語』「夕顔」の場面設定との重なり方など、今まで見てきたことから明らかなように、顕著なものであったことが理解されよう。

世は、清盛の横暴により、福原への遷都を余儀なくされた。その結果、京の町は、『方丈記』が記すように、荒涼としたものとなってしまった。旧都が荒れ果てたものとなればなるほど、人々の旧都への念は、より強いものへととなっていく。その旧都への念とは、他の何ものでもない、華やかなりし時代の雅やかな都の姿に対する憧れの思いであった。だから、彼の地にあつても、人々は、「新都へ供奉ノ人々ハ、聞ユル名所ノ月ミムトテ、思々ニ被出ニケリ。」として、せめてそのような地でも、都での楽しかった世界を再現しようとする。それは彼らが、王朝的雅のスピリットを有しているが故であった。このようにして、人々は、旧都への思いをそれぞれに表現しようとする。徳大寺実定卿もその一人であった。

治承四年八月の十五夜、荒廢した京の町を歩く実定卿。昔の榮華

延慶本『平家物語』「実定卿待宵ノ小侍従ニ合事」に就いて

を知る者には、この光景は、あまりにも哀しく寂しすぎるものであったろう。そんな彼が訪ねた妹のところからは、美しい琵琶の音が聞こえていた。荒れ果て寂れてしまつてはいるものの、そこに彼は、『うつほ物語』や『源氏物語』などに代表されるような王朝的雅の世界を垣間見たに違いあるまい。まるで、『源氏物語』「橋姫」巻で、薫が透垣の戸をそつと開けて、姫君たちの姿を垣間見たように。

注

① 本文の引用は、次のとおりである。

〔延慶本〕北原保雄氏・小川栄一氏編『延慶本平家物語 本文篇 (上)』一九九〇年六月 勉誠社

〔長門本〕岡山大学池田家文庫等刊行会編『岡山大学本平家物語二十

卷 (三三)』一九七六年九月 福武書店

〔四部本〕高利弘氏編『訓読四部合戦状本平家物語』一九九五年三

月 有精道出版

〔源平盛衰記〕黒田彰氏・松尾葦江氏編『源平盛衰記 (三三)・(四)』

一九九四年五月 三弥井書店

〔覚一本〕梶原正昭氏・山下宏明氏編『新日本古典文学大系 平家物

語 (上)』一九九一年六月 岩波書店

〔百二十句本〕高橋貞一氏校訂『平家物語百二十句本』一九七三年十

月 思文閣

〔うつほ物語〕中野幸一氏『新編日本古典文学全集 うつほ物語

(二)』二〇〇一年五月 小学館

〔源氏物語〕柳井滋氏ほか編『新日本古典文学大系 源氏物語 (一)』

延慶本『平家物語』「実定御待宵ノ小侍従ニ合事」に就いて

(二) 一九九三年一月、一九九四年一月 岩波書店

(菅家文章) 川口久雄氏校注『日本古典文学大系 菅家文章 菅家後集』一九六六年十月 岩波書店

② ③の櫻井氏・志立氏論文の他にも、佐伯真一氏『平家物語』の「都遷先蹤」(『帝塚山学院大学日本文学研究』十八号 一九八七年二月)、黒田彰氏「都遷覚書——太子伝との関連」(『国語国文』五十七卷五号 一九八八年五月)、その他がある。

③ 櫻井陽子氏『平家物語』巻五『月見』をめぐって(『軍記と語り物』二十一号 一九八五年三月)

④ 志立正知氏『平家物語』における「都遷」について(『日本文芸論叢』五号 一九八六年三月)

⑤ 阿部秋生氏ほか『新編日本古典文学全集 源氏物語(一)』の注(一九九四年三月 小学館)